文 献 紹 介

『文化歴史地理』創刊号

韓国文化歴史地理研究会　1989年6月

B5判　101ページ　年会費20,000ウォン

大韓民国において，地理学が大学の学科として地位を得たのは1945年以後で，特に実質的な活動は1963年に大韓地理学会の機関誌である「地理学」が刊行されてからである。しかし，文化・歴史地理学が大学における地理学の一分野として確立するのはさらに遅れ，大学院での当該分野の専攻者が増加してきた1970年代以後であった。

このような中で，1980年代における伝統的・民族的な地理認識・環境知覚に基づく歴史的文化景観の復原・解釈の胎動とともに，韓国文化歴史地理研究会が1988年2月に発足した。そしてこの度，その機関誌として『文化歴史地理』創刊号（年1回刊行）が発刊された。この研究会は，1987年4月からほぼ月1回のスケジュールで開催され始めた「韓国伝統地理学連続講座」のメンバーを母体として組織されたものである。会員数は，機関誌によれば55名であるが，本年3月末には80名程度に増加している。また，名称も1989年11月の総会で，韓国文化歴史地理研究会から韓国文化歴史地理学会に，発展的改称がなされている。

さて本号には，李燦氏による創刊辞が巻頭を飾っているほか，次の5編の論文が1～2ページの英文要旨とともに掲載されている。

「朝鮮時代漢陽の郊地域研究」　崔永俊
「最近韓国村落の景観変化に対する理解」金徳鉉
「日帝下京城府の土幕村形成」　南縈佑
「地域歴史地理学と文化生態学」　柳濟憲
「美国南部の稲作農業地域に関する研究」李　錢

崔永俊氏は，欧米や日本の都市近郊の構造と対比しつつ，大韓民国の伝統的空間概念を基盤とした，都市近郊の構造の再建を提唱している。また，金徳鉉氏は1970年代以降のセマウル運動に伴う村落景観の変化について，さらに南縈佑氏は日本による植民地政策に伴う離農者の都市集中と土幕村の形成に関して論じている。柳濟憲氏は，欧米における諸研究を整理しつつ，地域歴史地理学（あるいは歴史地誌学ともいえよう：評者）における文化生態学的視点の必要性を強調しており，本学会における来年度の共同課題に通じるものがあるようにも思われる。最後の李錢氏の論文は，ルイジアナ州立大学における学位（博士）取得論文に基づいて執筆されたものである。

いわゆるハングル世代が多くなったものの，これらの論文は漢字交じりのハングル文で書かれており，多少のハングル語の知識があれば，辞書を引きながら読むことも可能である。

論文に続いて2編の書評とともに，1987年5月～1988年4月の第1次連続講座および1988年5月～1989年4月の第2次連続講座の，都合24回の発表要旨が掲載されている。これらの発表は，「韓国水田農業の地域的展開過程」や「朝鮮時代コンソ湾の水産業」など，まさに伝統的歴史地理学の視点に基づくものから，「風水思想と村落立地」や「地理思想と都城計画」「空間観と景観の歴史的進化」など人文主義的歴史地理学を射程に置いた研究視角まで，極めてバラエティーに富んでいる。なお，第3次の連続講座の要旨は，近日中に発行される『文化歴史地理』第2号に掲載される。また，第4次のスケジュールは，「学界ニューズ・レター」第6号によれば，1990年9月～1991年7月の奇数月に開催される予定である。

本会のもう一つの事業として，年1回の巡検が実施されている。昨年度は江華島において行われ，その巡検（踏査）報告が掲載されている。本年度は5月26日～27日に忠清南道西海岸一帯で実施された。

さらに，会員消息の記事が掲載され，会員の執筆による書籍出版の状況や学位（博士）取得ニュースのほか国際会議での活動などが網羅されており，大韓民国における文化・歴史地理学者の活躍を知ることができる。

現在，韓国文化歴史地理学会の事務局は下記の場所に置かれており，大韓民国の歴史地理学や文化地理学・人文地理学に関心のある方は，ハングル語でなくとも英語ででも問い合わされたい。なお，学会事務局の置かれている研究室の李惠恩教授は，わが国の歴史地理学会の会員でもある。

・韓国文化歴史地理学会
大韓民国 Seoul 市中区筆洞3—26
東国大学校師範大学地理教育科
（李惠恩　教授）

（古田悦造）